人間学としての歴史学

歴史文学読本

尾崎秀樹＋菊地昌典

長谷川伸・吉川英治・真山青果・海音寺潮五郎・山本周五郎・大佛次郎・松本清張
司馬遼太郎・森鷗外・島崎藤村・芥川龍之介・菊池寛・江馬修・井上靖

歴史文学読本

人間学としての歴史学

尾崎秀樹＋菊地昌典

平凡社

歴史文学読本　人間学としての歴史学
定価　一、三〇〇円
発行日　一九八〇年三月十八日　初版第一刷発行

著　者　尾崎秀樹・菊地昌典
発行者　下中邦彦
発行所　株式会社平凡社
東京都千代田区四番町四の一
郵便番号　一〇二
電話　東京（〇三）二六五―〇四五一
振替　東京八―二九六三九
印刷所　星野精版印刷株式会社
製本所　株式会社石津製本所
© 尾崎秀樹・菊地昌典　1980　Printed in Japan
落丁・乱丁本のお取替えは直接本社サービス課までお送り下さい（送料は小社で負担します）

第一章 歴史小説と歴史学 歴史的想像力
「蒼き狼」「収容所群島」「山の民」他 …… 7

第二章 長谷川伸 仰角史観の重さ
「荒木又右衛門」「日本敵討ち異相」「日本捕虜志」他 …… 41

第三章 吉川英治 国民文学と民衆
「宮本武蔵」「新・平家物語」「新書太閤記」他 …… 63

第四章 真山青果 通俗の活性化
「国定忠次」「元禄忠臣蔵」「平将門」他 …… 85

第五章 海音寺潮五郎 隆盛にかける想い
「西郷隆盛」「悪人列伝」「茶道太閤記」他 …… 109

第六章 大佛次郎 時代批判の精神
「天皇の世紀」「パリ燃ゆ」「ドレフュス事件」他 …… 131

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

第七章 山本周五郎 静止した歴史空間
「縦ノ木は残った」「ながい坂」「さぶ」他 151

第八章 松本清張 権力の冷酷さ
「遠い接近」「西郷札」「昭和史発掘」他 173

第九章 司馬遼太郎 明快な歴史観
「空海の風景」「翔ぶが如く」「峠」他 201

第十章 森鷗外 合理・非合理の総体
「歴史其儘と歴史離れ」「堺事件」「阿部一族」他 219

第十一章 島崎藤村 維新激動の内実
「夜明け前」「東方の門」「新生」他 245

第十二章 菊池寛・芥川龍之介 主知
「恩讐の彼方に」「羅生門」他 271

第十三章 江馬修 階級史観を超えて
「山の民」「本郷村善九郎」他 291
第十四章 井上靖 乾いたロマン
「楼蘭」「天平の甍」「おろしや国酔夢譚」他 315
第十五章 史伝・伝記 司馬遷の眼
「史記」「馬場辰猪」「近世日本国民史」他 339
●歴史文学展望 木と土と石 364
あとがき 374

装幀＝池田枝郎

歴史文学読本

人間学としての歴史学

尾崎秀樹＋菊地昌典

第一章

歴史小説と歴史学

歴史的想像力

「蒼き狼」「収容所群島」「山の民」他

尾崎　歴史記述と文学記述の根本的な違いの一つに、虚構というものがありますね。歴史家は虚構を極力排斥するわけでしょう。すると文学者が持っている歴史文学の中における虚構というものを、どう受けとめるのか。

菊地　文学者のほうは、歴史家が虚構を排除すると、たいへん褒めてくれるが、歴史家は歴史叙述をする場合に虚構を排除できないというのが、ぼくの考えなんです。

尾崎　その溝を最終的にどう越えるかというところで、歴史と文学との基本的な違いが意識されねばならない。

菊地　文学者は虚構をもって迫り、歴史家は事実をもって迫るという、本質的、あるいは宿命的な違いがある。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

歴史記述と文学記述の違い

尾崎　ここ数年、歴史文学論議が盛んになってきました。その基礎には、歴史の研究に従っている歴史家、歴史学者などまで含めて、歴史へコミットする基本的なあり方というか、そういうものへの問い直しがあったと思うんです。

菊地さんはその火つけ役の一人であると思いますが、ソビエト、あるいはロシアにおける政治史とか、政治思想史がご専門のあなたが、歴史文学についてアプローチしようとなさったそもそもの動機は、どういうことですか。

菊地　ぼくはソビエト史を一つの専門に選んでいます。その研究対象としては、スターリン時代というのがすっぽり入ってくるわけです。ところが、スターリン時代を研究していると、どうしてもスターリン時代を支えていたものは何かという問題にぶつかるわけですね。そうすると、それを支えていたのは、当時のソビエトのナロードではないかという問題になってしまうんです。

人民史観とか民衆史観とか、史観のカテゴリー、名称はいろいろあると思いますが、ぼくは歴史というものを支え、動かしていくのは民衆であるということは、否定できない事実だと思います。問題は、民衆というものを歴史の位相の中でどう位置づけるか、あるいは歴史における民衆の役割をどう叙述するのか、それが歴史家に課せられてしまうわけなんですね。

ところが、実際問題として、民衆はわれわれ歴史家のために資料を書き残すということは絶対にしてくれないわけで、ことばとして当時発せられ、あるいは意識として描かれたさまざまな想念は、まったく手がかりもなく消えて行く。しかし、消えては行くが、その都度その都度、歴史を動かしているという問題があります。それを歴史家がどうつかまえるかということになると、方法論的にさがしあぐねてしまう、戸惑ってしまうんです。

ですから、媒体として歴史小説を考えてみて、現在の、あるいは一九三〇年代の、あるいは明治から大正にかけての、時代はいつでもいいのですが、その当時の民衆がもっとも愛読していた歴史小説なるものを一つの材料として、民衆の歴史へのかかわりあいの姿勢みたいなものを探ろうという、かなり便宜主義的な考え方で初めはあったわけです。

ところが、そう考えてくると、逆に今度は、歴史家が書くものの中に、かつて民衆の姿が生き生きと再現されたことがあるだろうかという疑問にぶつかってしまう。すると、歴史家が歴史を叙述する叙述そのもののしかたと、文学的な叙述のしかたとのかかわりあいという問題を、歴史家は考える必要があるんじゃないか。

つまり、歴史家が歴史を叙述する場合に、文学者が歴史を叙述する方法の中から多分に摂取できるものがあるのではないかということから、歴史小説を考えてみようと思っているんです。

尾崎　基本的にはよくわかるんですが、文学をやる者の側からいうと、文学者の歴史記述というか、歴史の中における民衆の役割なりをどう位置づけるかという問題は、それぞれの作家の営みの中にあると思うんです。

ただ、歴史記述と文学記述の根本的な違いの一つに、虚構というものがありますね。歴史家は虚構を極力排斥するわけでしょう。虚構は史実としての価値を持たないという形で拒否される場合が多いですね。すると、文学者が持っている歴史文学の中における虚構というものを、どういうように受けとめるんですか。

菊地　尾崎さんのいわれる意味を逆手にとれば、文学者のほうは、歴史家が虚構を排除すると、たいへん褒めてくれるわけだが、歴史家は歴史叙述をする場合に虚構を排除できないというのが、ぼくの考えなんです。

というのは、虚構を、事実として確認できないものを事実として書くととれば、歴史家はそういうことはしません。しかし、事実としてかつてあったものが埋没しているという事実を、歴史の中にどう取り込むかということは、依然として歴史叙述の問題として残っていると思います。

たとえば古代史をやる場合、古代の史料はたいへん乏しい。歴史家も松本清張さんのような方も、古代に関するさまざまなイマジネーションを発動させるわけですね。つまり、イマジネーションの世界に遊ばなければ、歴史は再現できないという問題がある。

これが近・現代史になれば、逆の問題があります。膨大な史料があり、しかも虚々実々、さまざまに入りまじっているわけです。それをどう選択するかは歴史家の主観であるけれども、その主観の中に虚構がまじることは十分に考えられるんですね。

ぼくにいわせると、歴史家は決して事実だけに基づいて

ものをいっているのではない。そこから歴史が成り立っている。事実でないものは、われわれ歴史家は使わないようなことをいうが、そこにいまの歴史家の欠陥があるように思うんです。

尾崎　菊地さんがおっしゃるように、歴史の把握あるいは記述の場合、豊かなイマジネーションを持ち、それを通して、あり得ただろう歴史、あるいはあり得たかもしれない歴史をとらえていくところまで成長してくれれば、ほんとうの史家になり、歴史家になり得ると思うんですが、現実の世界ではなかなかそうなってくれないというもどかしさがあります。

それから、ことばを返す意味じゃないんですが、歴史家あるいは文学者のイマジネーションを虚構論でつかまえるのは、ちょっと違うのじゃないでしょうか。

菊地さんのことばをイマジネーションと置き換えれば、それはまさにぼくの期待する答でもあるんですが、文学者の虚構論というのは、極端にいえば嘘をもって現実を逆照射するやり方ですね。これは歴史記述の場ではなかなか採用できない方法だと思うんです。

歴史と文学は、互いにイマジネーションを増殖しあっていくが、同時に歴史家は与えられた歴史のファクトの中から空白を埋めていく操作が要求されるけど、作家は虚構をもって埋めるという、つまり対極にあるようなものを置くことによって別の側から照射させていくやり方があるわけですね。

菊地　そう。それは十分あり得ると思う。

尾崎　だから、その溝を最終的にどう越えるかというところで、歴史と文学との基本的な違いが意識されなければならないんじゃないか……という問題を、こっち側から出しておきます。

虚構をもって歴史を逆照射する

菊地　文学者は虚構をもって迫り、歴史家は事実をもって迫るということの食い違いは、やっぱりあると思います。食い違いというか、本質的、あるいは宿命的な違いがあると思うんです。

しかし、たとえば文学者は虚構をもって歴史を逆照射するという場合、その逆照射というのは文学者自身の歴史観によって左右されるわけです。ずいぶん逆照射したかにみえる歴史小説もあるが、それは実に貧弱な、あるいは貧困

な歴史観に基づいた、歴史小説と自称するものがたくさんあると、ぼくは思います。

歴史家が事実をもって歴史を構成できる筈がないという自戒を含めて、そこにどうしてもある種の主観と称するような虚構の世界、あるいはイマジネーションの世界に遊んで、史料を体系づけていくことが不可避なんですね。

だからいちばん簡単な例は、伝記にあると思うんです。尾崎さんも『伝記吉川英治』なんかをお書きになっていて、よくおわかりだと思いますが、日本の歴史家は伝記をたいへん軽蔑するわけです。ヨーロッパと違って、なぜ日本で伝記が軽蔑されるかというと、人間を描くことが歴史家にとって最高の望ましい仕事であるにもかかわらず、伝記は歴史家本来の仕事ではない、伝記は歴史ではないとされているからです。

ここに日本の歴史学の問題がある。つまり、事実で迫っていくという迫り方が、人間を描写する場合にどうしてもできにくい。人間を描くことはたいへんむずかしいと思うわけです。

それからまた、ちょっと気を許せば、その人間を通して自分自身を反映させるようなことにもなりかねない。ぼくは人間というのはそう簡単につかまえられるもんじゃないという考えを持ちますけど、何か数字で押えていけば歴史は科学としての意味を持ち得るんだという考え方が一方にあるわけです。定量化できる歴史こそ科学であるというような。

そういうものに対しての歴史家に対する批判だとぼくは思うし、逆に尾崎さんのいう、虚構をもって歴史を逆照射する文学者の側に対していえば、はたして虚構をもって歴史を逆照射した歴史小説というのは、いったいどのくらいあるんだろうか。

尾崎　理想的なケースはたいへん少ないと思うけどね(笑)。そこで『蒼き狼』についての論争ですが、菊地さんは今日の時点でどのように振り返って考えられますか。

菊地　『蒼き狼』論争は、大岡昇平さんの激しい批判と井上さんの反批判という形で終ってしまったわけですけれども、ある時代相を描く場合に、その時代相を構成している、いわゆる歴史的事実というもののエレメントから逸脱できるのかできないのかということだろうと思うんです。

だから、まさに尾崎さんがいわれたように、井上さんは虚構をもって歴史を逆照射することを狙ったと思うんです

ね。そして、大岡さんは、そういう虚構は許されないというふうに主張したと、ぼくは考えます。

虚構と事実というものの扱い、あるいは文学の中における位置づけの違いなのでしょうが、現在考えてみて、『蒼き狼』論争がはたして戦後の歴史小説ブームの中にどれほど問題として取り入れられてきたかということになると、私はたいへん疑問ですね。文学者自体が、その問題の含んでいる重要性について、それほどその重さをくみ取っていなかったんじゃないか。

尾崎　それは歴史家の場合も同様だと思うんですけどね。

菊地　同様です。

尾崎　あそこに歴史文学の基本的な問題がちゃんと出ていたと思います。にもかかわらず、それをまっとうに受けとめて、彫り込んでいくという形に論争が進まなかった。日本の論争は、いつの場合もそうなんだけれども、論争が行われたということで何となくまとまっちゃって、問題はちっとも解決されない。『蒼き狼』論争はマスコミ史的には残ったかもしれませんが、お二人の論争の出発点から少しも進んでないわけです。そのじれったさみたいなものを感じますね。

菊地　おっしゃるとおりですが、ただこういう問題はあるんじゃないでしょうか。大岡さんの批判は、たいへん鋭い、立派な指摘だと思いますが、そのこと自体がかえって大岡さんの歴史小説の幅をいやおうなく自制してしまった。

尾崎　そう。自縄自縛になっちゃってるところがありますね（笑）。

菊地　ああいう批判のスタイルをとれば、いまの歴史小説ブームといわれるものの大半が、いろんな形で批判できると思うんです。その分野では、おそらく歴史家は大活躍するでしょう。しかし、事実と違うとか、たとえば三田村鳶魚式のこまかい時代考証で相手をやっつけるとかで、本質的なものは何も変りようがないだろうと思うんです。つまり、井上さんが描こうとしたジンギスカン像というものは井上さんの心の中で微動だにしないだろうというところに一つの問題があるんじゃないでしょうか。

尾崎　確かに大岡さんのやり方でいけば、『山の民』（江馬修）しか残らなかったりする。

菊地　ええ、そう。

尾崎　『山の民』は飛騨の山国の人々をおそった政治的

問題を社会階層的に切り込んでいって、明治維新の夜明けの時代の暗い屈折みたいなものを全体像でとらえている。一つの図式としては見事なピラミッド像を持っていると思いますけれど、にもかかわらず、文学として最終的にグッと訴えてくる素朴な感動にもの足りなさを感じますね。つまり、調べた小説の典型であって、奮闘賞か何かを贈るのはいいけれども、島崎藤村の『夜明け前』と並べた場合に、やっぱり『夜明け前』をとりたいような気持ちがありますね。

歴史小説における会話の問題

菊地　最近ぼくは奈良本辰也さんが送ってくれた『もう一つの維新』というのを読みました。長井雅楽のね。たいへん面白いと思ったし、歴史家が歴史小説を書くということは、文学者が歴史小説を書くのと違った意味で、かなりの冒険だろうと思いました。

尾崎　苦労があると思いますね。

菊地　つまりそれは、事実と虚構のかね合いの問題ですね。あれを読んでいくと、歴史家としてはここまでしかいえないというようなニュアンスの文章が、随所に出てきます。一方では自由な会話体が出てくる。この会話体はおそらくイマジネーションだろうと思うんです。

尾崎　それ以外の何ものでもないですね。録音テープが残っているわけではないんだから。

菊地　そうそう。しかし、それを入れなければ、長井雅楽なら長井雅楽というある一つの時代の中で、結局自分の意志が通されずに、最後に腹を切らざるを得なくなるという悲劇的な主人公を描けないでしょう。

尾崎　歴史家にとっては、会話の部分はたいへんこわいと思うんですよ。どこに証拠があるといわれればね。しかし、小説をつくっていく上で、会話は欠かすことのできない部分でしょう。

菊地　そうです。

尾崎　史伝風に書くならともかく、小説として描く場合は、人間像を浮き立たせるための一つの手段としてどうしても必要なわけですね。だから、その辺には確かに歴史家の足もとを縛ってしまうような、そういう落とし穴みたいなものがあると思うんです。

菊地　会話が録音される筈がない時代に会話を入れることが、歴史小説と歴史の違いということはあると思います

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo